

2011年度ドラッカー学会エッセイコンテスト審査結果

審査委員長 小林 薫

総評：

今年度は例年に比べて応募本数が少なかったとはいえ、どれもそれぞれ味があり、審査すること自体を楽しめました。教育関係者の応募が多かった今年度、とくに光っていたエッセイを優秀作品として選出しました。佳作の2点もすばらしく、どの作品からもドラッカーの遺志を未来に継いでいく力強い息吹が感じられ、大変うれしく思います。

最優秀作品：該当無し

優秀作品：木之下 浩一「ドラッカー氏に学ぶ学校のマネジメント」

(大阪市立小学校教頭・47歳)

担任として「学級経営」をする立場から、教頭として「学校経営」をする立場への変化に、自分が追いついていかず苦悩しつつも、ドラッカーのマネジメント論を取り入れ、試行錯誤しながら、自分なりのマネジメントを形成していく様子が克明に描かれており、心打たれました。学校という現場で、教職員のみならず、児童にもまた強み論が効を奏すことに、ドラッカーの普遍性を再認識しました。

準優秀作品：天米 一志「ドラッカー博士に教わるPPP（官民連携）」

(香川県まんのう町教育委員会・47歳)

グローバル化が劇的に進行している現在の日本にとって大きな課題の一つである官民連携をとりあげ、ドラッカーの視点を基にして、現状を冷静に分析しつつ、いちばん効果を出すためにはどうしたらよいかを多角的に追究していくところに感心しました。

準優秀作品：和田 勇人「私の人生を支える青春の書」

(株式会社大塚商会九州支店課長代理・40歳)

ドラッカーと出会い、もがきながらも企業人として生きていく志を固めていく様子が鮮明に描かれていて、多くのビジネスパーソンにとって共感できる内容になっていると思います。このエッセイを読んで、ドラッカーは各人に未来を見るための視点を与えてくれるのかもしれないなと感じました。

以上